

学生のモチベーションと英語の学力について

上垣 宗明*

The Research on the Students' Motivation and Their English Ability

Muneaki UEGAKI*

Keywords : consummatory motivation, intrinsic motivation, English ability

1. はじめに

動機づけについて小西（1994）は「社会的・心理的要因としての動機づけは、長年、言語学習の成功に重要な役割を果たすと考えられてきた」⁽¹⁾と述べている。このように、以前から言語学習と動機づけの関係は注目されていた。日本でも、言語学習における動機づけについての研究は盛んになってきている。

しかし、動機づけの研究は、欧米諸国、特にカナダでの研究が発端とされており、日本での第二言語習得とは違う環境のもとでの研究である。この研究で著名な Gardner & MacIntyre (1991)は、“...that both integrated motivation and instrumental motivation can influence second language learning.”⁽²⁾と述べている。また、同様に彼ら（1991）は、“... both instrumentally motivated and integratively motivated subjects learned better than subjects not so motivated.”⁽²⁾とも述べている。integrated motivation（統合的動機づけ）と instrumental motivation（道具的動機づけ）の高い学習者は、その低い学習者に比べてよく学習することが分かる。

日本における統合的動機づけと道具的動機づけの違いについては、『応用言語学辞典』に次のような記述がみられる。

Gardner and Lambert(1972)は、仕事や生活上有利なので目標言語を学習するといった実用目的達成のための言語使用願望を道具的動機づけ (instrumental motivation)、目標言語が用いられている社会の一員とみなされるようになりたいという融合・同化願望を(integrative motivation)と分類した。・・・日本のように外国語として英語学習を行う状況で趣味として学習する場合のように、学習者が外国語習得に満足し意義を感じ

る気持ちを達成的動機づけ (consummatory motivation)とするなど、さまざまな視点からいくつかの分類が提唱されている。⁽³⁾

先述したように、動機づけに関しては、カナダを中心とする欧米諸国での研究と日本での研究には、言語学習の背景が異なっている。そのため、統合的動機づけと道具的動機づけの2通りに分類するのは、日本の現状にあっていない。それに関連して、小西（1994）の記述が参考になる。

統合的動機づけという時に、この考え方の発祥の地であるカナダでの第二言語の学習環境と、日本での英語学習環境では明らかに、統合 (integrate) という表現に含まれる意味合いが異なっていることに気づかなければならない。・・・一方、日本での英語学習環境で用いられる統合という用語は、例えば、アメリカ文化にあこがれて、アメリカ人の仲間になったような行動がとれるようになりたいといった、どちらかというあまり切迫感のない意味合いで用いられているようである。⁽¹⁾

この記述からも分かるように、日本の言語教育では統合的動機づけという概念はそぐわないように思える。『応用言語学辞典』の記述のように道具的動機づけと、あまり切迫感のない統合的動機づけ、つまり、達成的動機づけと分類する方が適しているように思われる。

動機づけには上記のような分類の仕方以外にも分類方法がある。もう一つの代表的な分類について、『応用言語学辞典』に次のような記述がある。

動機づけとは、たとえば外国語習得という大きな目標の達成、あるいは、さらに細かな個々の目標の達成に結びつくような心理的な特性であり、内

* 一般科 准教授

的動機づけ(intrinsic motivation)と外的動機づけ(extrinsic motivation)とがある。前者は、達成感、自尊心、問題を解決した誇り、授業が充実しているという気持ち、思った通りに言語活動ができることなどを指し、後者は課題自体とは別のもの、つまり課題をこなした結果得られる報酬・地位・テストの点数・資格などを指す。⁽³⁾

これらのいくつかの動機づけの分類を見てみると本稿で調査する“動機づけ”とは、達成的動機づけと内的動機づけを調査対象としている。

小西(1994)は、「また、・・・第二言語習得と一口に言っても、さまざまな学習環境が考えられるということ念頭に置き、それぞれの学習環境特有の条件を考慮して動機づけを考えていかなければならないのである。」⁽¹⁾とも述べている。日本での動機づけに関する研究や調査は大学生や中高生を対象にした研究がほとんどで、高等専門学校をを対象にした研究はほとんど行われていないのが現状である。高等専門学校という5年間の一貫教育を実践している本校では、高等学校や大学などとは違う環境で学生たちは学習している。当然、英語学習に対しても高専生独自の要素が影響しているのではないかと思われる。

高専と高校の違いとして、修業年限の違いをあげることができる。高専は5年間に対し、高校は3年間である。また、高校生の進路は様々であるが、センター試験を筆頭に文系と理系の大学入試では、英語の試験が課せられている。それに対して、高専卒業後の進路も様々だが、大学への編入試等を参考にすれば、高校生に比べると英語に対する比重は軽く、英語よりも専門科目の比重が重く感じる。たとえば、本校の専攻科への入学試験に関しては、英語：数学：専門科目の比重は、1：1.5：2となっており、英語は専門科目の半分の比重である。このようなことから、高専生の英語への動機づけは必然的に低くなり、高校と高専では異なった環境で英語を学習していると言える。

大学と比較した場合は、年齢的な違いを指摘することができる。高専は15歳～20歳だが、大学は18歳～22歳の学生が対象となる。また、大学は様々な学部や学科があり、異なった学部では、異なった英語への動機づけが見られる。大学での調査や研究の場合、英語への動機づけの研究対象となるのは文学部や外国語学部の英語を専門とする学生がほとんどである。本校のような工業高等専門学校と比較可能なのは工学部や理学部の学生であるが、このような学生を対象とした研究はほとんど見られない。

本稿では、高専生の英語に対する動機づけ、特に、内的な達成的動機づけという観点から英語の試験に関する事柄を調査し、分析していく。

本研究での統計処理は、「エクセル統計 2008

(SSRI：社会情報サービス株式会社)」を使用し分析する。

2. 調査について

本高専の1年生3クラス(class A 40名,class B 40名,class C 39名 合計119人)を対象に調査を行った。まず、英語の動機づけに関するアンケートを実施した。その結果をもとに、文法性判断テスト、新入生実力試験、前期中間試験や前期定期試験の結果を用い、分析していく。

2.1 動機づけの調査

動機づけを調査するための質問紙は14項目からなり、4段階評価(1, 全然そう思わない、2, あまりそう思わない、3, だいたいそう思う、4, まったくそう思う)で回答を求めた。質問紙を作成するにあたり、『外国語教育リサーチマニュアル』⁽⁴⁾を参考にし、著者が作成した(Appendix 1)。

2.1.1 実施日時

class A：平成21年4月20日(月)

09:40～09:50

class B：平成21年4月20日(月)

14:35～14:45

class C：平成21年4月16日(木)

09:40～09:50

それぞれ、2回目の英語の授業で実施した。

2.1.2 教示

全クラスに、「このアンケートは成績と全く関係がありません。自分の気持ちにあてはまるところを○で囲んでください。」と教示した。

2.2 文法性判断テストについて

入学後最初の英語の授業で文法能力を測定するテストを実施した(分析対象として60問中27問を抽出)(Appendix 2)。

2.2.1 実施日時

class A：平成21年4月17日(金)

11:20～11:50

class B：平成21年4月16日(木)

13:40～14:10

class C：平成21年4月15日(水)

09:35～10:05

2.2.2 教示

「あまり深く考えずに直感的に回答するように」と教示した。

2.2.3 出題形式

例) 1) Which do you like good, tea or coffee ?

解) × good → better

2) Who was late for school ?

解) ○ _____ → _____

例のように、例文が記述してあり、その例文が文法的

に適切か、不適切かを判断させ、不適切な場合は、適切な語句に書き換えさせる問題を作成した。抽出した問題の文法項目は以下の通りである。

- 1, be 動詞に関する問題 5問
- 2, 3 単現に関する問題 5問
- 3, 進行形に関する問題 4問
- 4, 冠詞に関する問題 4問
- 5, 代名詞の格に関する問題 4問
- 6, 受動態に関する問題 5問

採点は、各問題 2 点配当とした。そのテストに関する結果の概要を以下に示す。

サンプル数：119 平均：39.19 標準偏差 5.60

最高点：51 最低点：26 中央値：39.5

2.3 実力試験

平成 21 年 4 月 13 日 (月) 10:15~11:00 実施
新入生を対象に春休みの課題として課した問題集より大部分を出題した。その結果の概要を下記に示す。

サンプル数：119 平均：82.9 標準偏差 9.25

最高点：100 最低点：59 中央値：84

2.4 前期中間試験

平成 21 年 7 月 1 日 (水) 9:00~9:50 実施

サンプル数：119 平均：68.2 標準偏差 12.78

最高点：96 最低点：44 中央値：69

2.5 前期定期試験

平成 21 年 9 月 25 日 (金) 9:00~9:50 実施

サンプル数：119 平均：65.5 標準偏差 14.96

最高点：98 最低点：30 中央値：65.5

3. 分析結果

学生の英語に関する動機づけのアンケートを分析した。質問紙の 14 項目が同じような概念を測定しているのかを示す指標である内的一貫性についても注意を払った。内的一貫性を測定するためにクロンバック α 係数という値を用いた。ゾルタイ (2006) は、「うまく作られた質問紙であれば、たとえ 10 項目程度しかない場合でも、内的一貫性による信頼度係数は 0.8 程度あります。⁽⁵⁾」と述べている。この指摘に沿うように、クロンバック α 係数が 0.8 に近づくように分析を加えた。

まず、14 項目全てに対して、クロンバック α 係数を求めた。その結果、0.607 と数値が低かった。項目 6, 7, 8, 9 がマイナスの数値を示していたために、それぞれの数値を $5-X$ (X は素点) で計算した。その結果、クロンバック α 係数は 0.75 となり、0.8 にかなり近づいた。更に、7 と 14 を削除すれば、0.79 となった。この 2 項目を削除した残りの 12 項目で内的一貫性が十分に確保されていると思われる。今後の分析対象として、項目 7, 14 を除いた 12 項目を分析対象とする。その結果の概要を下記に示す。

サンプル数：119 平均値：33.14 標準偏差：5.58
最大値：45 最小値：18

次に、アンケートの総得点で、上位群、中位群、下位群の 3 群に分け、試験の点数の平均に違いがあるのかを分析した。その結果を下記に示す。

表 1 アンケートの総合点について

| | 上位群 | 中位群 | 下位群 |
|-----------|-------|-------|-------|
| サンプル数 | 44 名 | 36 名 | 39 名 |
| アンケートの平均値 | 38.75 | 33.42 | 26.79 |
| 標準偏差 | 2.47 | 1.27 | 3.36 |
| 文法テストの平均点 | 39.09 | 40.56 | 38.13 |
| 標準偏差 | 5.64 | 5.88 | 5.21 |
| 実力試験の平均点 | 84.82 | 84.39 | 79.28 |
| 標準偏差 | 8.19 | 8.80 | 9.93 |
| 中間試験の平均点 | 72.82 | 69.75 | 62.21 |
| 標準偏差 | 11.50 | 11.35 | 13.04 |
| 定期試験の平均点 | 70.59 | 67.31 | 58.64 |
| 標準偏差 | 14.47 | 12.71 | 14.97 |

アンケートについては、上位の点数から 3 群に分けたので、明らかに差がみられる。他の試験について有意差があるのかを多重比較検定 (Scheffe 法) で分析した。

文法性判断テストの 3 群の分析結果を表 2 に示す。

表 2 文法性判断テストの分析結果

| | 平均値 | 差 | 統計量 | p 値 | 判定 |
|------------|----------------|------|------|-------|----|
| 上位群 中位群 | 39.09 40.56 | 1.46 | 0.68 | 0.507 | |
| 上位群 下位群 | 39.09 38.13 | 0.96 | 0.31 | 0.735 | |
| 中位群 下位群 | 40.56 38.13 | 2.43 | 1.77 | 0.174 | |

** : 1% 有意 * : 5% 有意

表 2 から、3 群においては文法性判断テストの点数において有意差は見られなかった。実力試験における 3 群の分析結果を表 3 に示す。

表 3 実力試験の分析結果

| | 平均値 | 差 | 統計量 | p 値 | 判定 |
|------------|----------------|------|------|-------|----|
| 上位群 中位群 | 84.82 84.39 | 0.43 | 0.02 | 0.978 | |
| 上位群 下位群 | 84.82 79.28 | 5.54 | 3.93 | 0.022 | * |
| 中位群 下位群 | 84.39 79.28 | 5.11 | 3.02 | 0.053 | |

**:1%有意 *:5%有意

表3に示したように、上位群と中位群では平均点にさほど違いがなく、有意差も見られなかった。しかし、上位群と下位群では5%水準で有意差が見られ、中位群と下位群においても、有意差ではないが、有意傾向がみられた。

4月当初に、動機づけに関するアンケートと実力試験を実施したにもかかわらず、動機づけにおける差が試験の点数の差としてあらわれた。中学校時代の英語教育がそのまま影響していると言えるだろう。次に、高専入学の2カ月後に実施した中間試験の分析結果を表4に示す。

表4 中間試験の分析結果

| | 平均値 | 差 | 統計量 | p値 | 判定 |
|-----|-------|-----|------|-------|----|
| 上位群 | 72.89 | 3.0 | 0.65 | 0.525 | |
| 中位群 | 69.75 | 7 | | | |
| 上位群 | 72.89 | 10. | 8.10 | 0.001 | ** |
| 下位群 | 62.20 | 61 | | | |
| 中位群 | 69.75 | 3.7 | 3.71 | 0.027 | * |
| 下位群 | 62.20 | 1 | | | |

**:1%有意 *:5%有意

同様に、9月下旬の定期試験の分析結果を表5に示す。

表5 定期試験の分析結果

| | 平均値 | 差 | 統計量 | p値 | 判定 |
|-----|-------|------|------|-------|----|
| 上位群 | 70.59 | 3.29 | 0.53 | 0.587 | |
| 中位群 | 67.31 | 5 | | | |
| 上位群 | 70.59 | 11.9 | 7.39 | 0.001 | ** |
| 下位群 | 58.64 | 5 | | | |
| 中位群 | 67.31 | 8.66 | 3.52 | 0.033 | * |
| 下位群 | 58.64 | 5 | | | |

**:1%有意 *:5%有意

表4、表5より、動機づけの違いによって中間試験と定期試験の点数に同様の違いがみられた。上位群と中位群で5%水準の有意差が、上位群と下位群で1%水準の有意差があった。中間試験と定期試験では動機づけの差がそのまま試験の点数に影響していることが分かった。

次に、動機づけについて、より詳しく分析するために、この12項目の因子分析(バリマックス法)を行い、各因子に対する寄与率の高い5項目を取り上げた。その結果を表6に示す。

表6 因子分析(バリマックス法)の結果

| 項目 | 因子1 | 項目 | 因子2 | 項目 | 因子3 |
|----|-------|----|-------|----|-------|
| 12 | 0.691 | 3 | 0.668 | 6 | 0.606 |
| 11 | 0.610 | 1 | 0.640 | 8 | 0.575 |
| 10 | 0.576 | 2 | 0.587 | 9 | 0.507 |
| 2 | 0.434 | 5 | 0.435 | 5 | 0.478 |
| 4 | 0.410 | 13 | 0.403 | 3 | 0.359 |
| 3 | 0.045 | 12 | 0.068 | 13 | 0.044 |

因子1では、12 外国の文化や習慣を勉強したい、11 世界の出来事に関心がある、10 英語以外の外国語も勉強したい、2 外国人ともっと会話してみたい、4 英語は簡単だと思う、の5つの項目の寄与率が高かった。因子2では、3 英語を話せるようになりたい、1 自分の英語が通じるとうれしい、2 外国人ともっと会話してみたい、5 将来、英語は大切だと思う、13 外国で暮らしてみたい、の5項目である。最後に、因子3では、6 英語を勉強するのは嫌だ、8 高専では英語の勉強は必要ないと思う、9 今後、英語よりも数学のほうが大切だと思う、5 将来、英語は大切だと思う、3 英語を話せるようになりたい、という項目であった。因子1は“外国への関心”、因子2は“英語への関心”、因子3は“英語学習への関心”とまとめることができる。

次に、因子1～3のそれぞれの因子5項目の学生の評価点を合計し、その合計点にもとづいて、上位群、中位群、下位群の3群に分けた。それぞれの群で、各試験の点数に違いがあるのかを検討する。

因子1に関する合計点で分けた3群で各試験の点数を集計した結果を表7に示す。

表7 因子1(外国への関心)

| | 上位群 | 中位群 | 下位群 |
|-----------|-------|-------|-------|
| サンプル数 | 36名 | 46名 | 37名 |
| 文法テストの平均点 | 39.61 | 38.37 | 39.89 |
| 標準偏差 | 5.39 | 5.68 | 5.76 |
| 実力試験の平均点 | 83.86 | 83.46 | 82.68 |
| 標準偏差 | 8.67 | 9.35 | 9.83 |
| 中間試験の平均点 | 72.67 | 69.87 | 62.46 |
| 標準偏差 | 10.78 | 12.27 | 13.11 |
| 定期試験の平均点 | 69.42 | 66.35 | 61.22 |
| 標準偏差 | 12.89 | 15.84 | 14.80 |

因子1については、このような結果となった。平均点においては、中間試験と定期試験に差がみられる。因子1の結果と同様に、因子2、因子3についても合計点を集計し、3群に分けた。それぞれの結果を表8、表9に示す。

表8 因子2（英語への関心）

| | 上位群 | 中位群 | 下位群 |
|-----------|-------|-------|--------|
| サンプル数 | 33名 | 47名 | 39名 |
| 文法テストの平均点 | 39.03 | 40.0 | 38.59 |
| 標準偏差 | 5.60 | 5.51 | 5.77 |
| 実力試験の平均点 | 85.25 | 84.02 | 79.72 |
| 標準偏差 | 8.47 | 8.44 | 10.164 |
| 中間試験の平均点 | 75.0 | 68.40 | 62.64 |
| 標準偏差 | 10.3 | 11.46 | 13.43 |
| 定期試験の平均点 | 71.94 | 66.53 | 59.44 |
| 標準偏差 | 13.88 | 14.31 | 14.56 |

表9 因子3（英語学習への関心）

| | 上位群 | 中位群 | 下位群 |
|-----------|-------|-------|-------|
| サンプル数 | 45名 | 36名 | 38名 |
| 文法テストの平均点 | 39.69 | 40.47 | 37.47 |
| 標準偏差 | 6.10 | 4.39 | 5.75 |
| 実力試験の平均点 | 85.07 | 85.78 | 77.53 |
| 標準偏差 | 7.71 | 8.35 | 9.64 |
| 中間試験の平均点 | 72.36 | 69.03 | 63.16 |
| 標準偏差 | 11.02 | 12.79 | 13.00 |
| 定期試験の平均点 | 70.64 | 66.56 | 58.97 |
| 標準偏差 | 14.24 | 13.59 | 14.74 |

動機づけの総得点を分析した時と同様に、因子1～因子3を多重比較検定（Sceheffe法）で分析した。その結果、有意差があったものだけを取り上げ検討していく。

全ての因子において、文法性判断テストでは有意差や有意傾向は見られなかった。

因子1において、有意差が見られたのは中間試験の上位群と下位群（ $p=0.002$, $p<.01$ ）、中位群と下位群（ $p=0.024$, $p<.03$ ）であった。その他については、5%水準でも有意差はみられなかった。

因子2については、実力試験で上位群と下位群（ $p=0.41$, $p<.05$ ）で5%水準の有意差が見られ、中間試験と定期試験の上位群と下位群（中間 $p=0.0001$, $p<.01$ ；定期 $p=0.001$, $p<.01$ ）で1%水準の有意差が見られた。

因子3については、実力試験を除いて因子2と同じ結果になった。実力試験においては、上位群と下位群（ $p=0.0006$, $p<.01$ ）、中位群と下位群（ $p=0.0003$, $p<.01$ ）で、1%水準の有意差が見られた。

文法性判断テストはどの因子でも有意差は見られなかった。その要因として考えられることは、他の試験は100点満点で評価しているのに対して、このテストは54点満点で評価したことである。そのため学生の点数にあまり差が生じずにこのような結果になった

のだろう。しかし、実力試験は、因子3（英語学習への関心）で特に強い有意差が見られた。これは、中学時代の英語学習への関心そのままの結果としてあらわれ、このような結果になったのだろう。

4. 考察

内的な達成的動機づけという観点から、4つの試験を対象として分析を行った。動機づけの高い学生と低い学生では、高専入学後の日頃の学習態度や意欲に違いが生じていることが推測できる。当然、動機づけが高い学生は前向きに英語学習に取り組んでいる。その結果、特に中間試験と定期試験の点数に顕著な有意差が見られた。動機づけが英語学習に非常に影響していることがわかった。

3つの因子を検出する因子分析の結果、因子1～因子3までの寄与率の高い項目を取り上げ考察した。3つの因子をまとめると、因子1は外国への関心、因子2は英語への関心、因子3は英語学習への関心とまとめることができた。その因子ごとに更に分析した結果、因子1よりも、因子2、因子3のほうが中間試験や定期試験の点数にかなり影響していることが見て取れた。特に、因子3については、文法性判断テスト以外の試験では動機づけの高低かで、試験の点数に違いがあることがわかった。外国への関心という内的動機づけよりも、英語学習への関心という外的な動機づけの要素を含むものが、試験の点数に与える影響が強かった。今後は、内的な動機づけだけでなく、外的な動機づけの調査も必要である。

5. 今後の課題

今回は動機づけについて質問紙を利用し調査した。質問紙に関しては、正確に動機づけが測定できる質問紙を作成できるような研究の必要性を実感した。質問紙だけではなく、より正確な動機づけを測定するためには面接や授業中の態度などを含めさまざまな視点からの調査が必要である。また、今回の調査対象となった内的動機づけだけではなく、試験でよい点数を取りたい、とか、単位を取りたい、といった外的動機づけが与える影響についても、学生の英語能力と動機づけの関係をより客観的に理解するためには調査していくことが必要である。

高専では、他の教育機関とは異なり5年間一貫教育を実践している高専独自の長期的な調査が可能である。1年生の4月と5年生の3月では、動機づけに変化が生じるので、その変化の過程を包括できるような長期的な研究も可能であり、必要である。

今後は、今回のデータだけではなくより多くの場面を利用し、さまざまなデータの収集が必要である。今

回、統計処理に利用した「エクセル統計 2008」は、さまざまな分析ができるので、このソフトを利用し、動機づけと英語学習の関係についてさらに、調査、分析をしていきたい。

最後に、この研究の目標は、動機づけと英語学習に関する関係をより科学的に分析し、その結果、今後の効果的な学生の英語学習だけではなく、効率が期待できる英語教育の実践に結び付けていきたい。

参考文献

- (1) 小西正恵著:「第二言語習得における学習者要因」、小池生夫監修、SLA 研究会編、「第二言語習得研究に基づく最新の英語教育」、大修館書店、pp.127-146、1994.
- (2) Gardner, R. C. & MacIntyre, P. D.: “AN

INSTRUMENTAL MOTIVATION IN LANGUAGE STUDY – Who Says It Isn’t Effective?–”, H. Douglas Brown, Suzan T. Gonzo, “READING ON SECOND LANGUAGE ACQUISITION”、Prentice Hall Regents、pp.206-225、1991.

- (3) 小池生夫 編集主幹:「応用言語学辞典」、研究社、2003.
- (4) ハーバード・W・セリガー、イラーナ・ショハミー著、土屋武久・森田彰・星美季・狩野紀子訳:「外国語教育リサーチマニユアル」、大修館書店、2001.
- (5) ゴルタイ・ドルニエイ著、八島智子・竹内理訳:「外国語教育学のための質問紙調査入門」、松柏社、2006.

Appendix 1

| | |
|----|----------------------|
| 1 | 自分の英語が通じるとうれしい |
| 2 | 外国人ともっと会話してみたい |
| 3 | 英語を話せるようになりたい |
| 4 | 英語は簡単だと思う |
| 5 | 将来、英語は大切だと思う |
| 6 | 英語を勉強するのは嫌だ |
| 7 | 文法よりも単語や熟語のほうが大切だと思う |
| 8 | 高専では英語の勉強は必要ないと思う |
| 9 | 今後、英語よりも数学のほうが大切だと思う |
| 10 | 英語以外の外国語も勉強したい |
| 11 | 世界の出来事に関心がある |
| 12 | 外国の文化や習慣を勉強したい |
| 13 | 外国で暮らしてみたい |
| 14 | 将来、エンジニアになりたい |

Appendix 2

| | 正解者数 |
|---|------|
| 1, Was the letter writing by him? | 93 |
| 2, French is speaking in this country. | 100 |
| 3, Tom and Ken is good friends. | 117 |
| 4, They are play the guitar now. | 117 |
| 5, These cakes were made yesterday. | 99 |
| 6, My sisters was out when I came back. | 90 |
| 7, A longest river in Japan is the Shinano. | 77 |
| 8, You bags are so big. | 96 |
| 9, One of our opened the door. | 16 |

| | |
|--|-----|
| 10, Please teach he how to use this computer. | 90 |
| 11, This is Kumi bag. | 112 |
| 12, Bill is go to speak Japanese. | 106 |
| 13, I am interesting in English. | 95 |
| 14, Jane got up early every morning. | 67 |
| 15, Those is your pens. | 110 |
| 16, He goes to school every day. | 115 |
| 17, We eating apples now. | 99 |
| 18, This is an big apple. | 92 |
| 19, Are that woman Mrs. Smith or Mrs. Obama? | 66 |
| 20, The boys are in that room yesterday. | 111 |
| 21, Takeo watchs TV every day. | 46 |
| 22, Each student study English very hard. | 16 |
| 23, The student who won the contest was giving a gold medal. | 32 |
| 24, The sun rises in east. | 4 |
| 25, Johnson have to help his mother. | 92 |
| 26, Bill doesn't going to read the book. | 106 |
| 27, Ken has a cat. The cat is black. | 110 |